

五条悟の妹 in 死滅回  
游 恐山結界

徐々に鹿野さん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

色々あって青森に住んでいた五条悟の妹（妄想）が死滅回游の結界の一つである恐山結界（妄想）に突入するまでの話。

# 目次

五条悟の妹	1
自分にしか出来ないこと	10



## 五条悟の妹

11月1日 15:34 青森県 九戸東高等学校 体育館内

「えー、既に見聞きしていることだと思えますが、本日早朝に県内の恐山を中心に、何らかの異常現象が発生したとの報道がなされています。加えて、同様の現象が日本国内の各地で発生しているという報道もあります。政府の見解も無く詳細は未だ不明であり、先の渋谷封鎖の件から不審な出来事が続きますが、現状はとにかく得体が知れず危険である、ということだけは言えるかと思えます。生徒の皆さんは興味本位で実地へと赴いたり絶対にしらないよう心がけてください。それから——」

☆

体育館で行われた校長による注意喚起を終えた放課後、部活動の停止を言い渡され帰宅途中の生徒達によって九里東高等学校内は騒然としていた。

「マジトーンだったね。やっぱこれ相当ヤバイことなんじゃない?」

「恐山つてのがガチ感ある」

「色んなところで起きてるんだろ？ テロ？」

「日本でしか起こってないんだって」

「タイムラインで流れてきた動画見たけどさ、なんか真っ暗だったよね。中の人どうなってるんだろ」

パニック、というよりは刺激的な噂話によって皆が興奮しているような雰囲気だった。そうして喧噪が廊下を蠢く中、それをすり抜けるように進む生徒が二人。

「朝より凄いな。みんな夢中だ」

「そりゃね。もうSNSでも動画が出回りがまくってる。噂じゃ済まないよ」

斜めに流れる前髪が特徴的な女生徒が話しかけ、もう一方の長身と右目の泣き黒子が目立つ長く伸びた黒髪の女生徒が応答する。静かな会話だった。

「教えてあげたほうがいいのかなあ」

「絶対ダメ。どうせ、ここまで事が大きくなっただから何かしら一般人向けの発表がされる筈。それまでは何聞かれても適当に流して、話を合わせて。慣れっこでしょ」

「うん……」

「こんな状況でバレて良いことなんて一つもない。断言出来る。——呪いが視えるなんて」

☆

呪い。人間から流れ出た負の感情。

時にそれは呪霊としてカタチを成し、人々を襲う。また、そう言った呪いを目視可能であったり『呪術』として呪いを利用し特別な力を振るう数少ない人間達が存在する。

言ってしまうえば彼女達二人——浅見摩耶子と冬水瑠璃はそんな少数派マイノリテイの内の二人であり、日本国内で発生した異常現象が呪いによるモノだという事実を理解していた。

☆

「いくら瑠璃がお人好しでもこの状況は危険すぎる。いつもみたいな人助けは当分禁止」

「……」

「自分の身が優先、ね？ もちろん私だってそうする」

「分かってる」

不安気な表情を浮かべる瑠璃に対し、摩耶子は念を押すように呟いた。二人はそのまま下駄箱の方へと向かう。

「あ、私プリント出しに行かなきゃ」

「待ってるよ」

「いいよ、先帰ってて。マヤちゃん今日お仕事でしょ」

「まあそうだけど……」

「モデルさんなんだから色々準備あるでしょ？ ほらほら」

「分かったよ」

ぐいぐいと押すような仕草で摩耶子を急かし、瑠璃は手を振った。

「バイバイ。気をつけてね」

「瑠璃こそね」

上履きから外靴へ。そのまま摩耶子が校舎を出ようとした時、瑠璃はぼそりと呟いた。

「マヤちゃんなら色んな人を助けられるのに……」

惜しむような声音のそれを、摩耶子は聞かなかったことにした。





(瑠璃のお人好しも困つちやうな。子供の頃から呪いが視えてたなら少なからず良くない思いをしてきただろうに)

街中を歩く摩耶子に度々注がれる視線。他と比べて目立つ容姿が原因ではあるが、いつもよりその量は少なかつた。

「取引先が——」

「昨日から連絡が——」

噂の異常現象。その影響は通行人からも見て取れた。視線、人々の動揺。それらを意にも介さず摩耶子は早足で通り過ぎて行く。

そして、そんな通行人達の中に明らかな異常が一つ。

【に”ー”】

蠅頭ようとう。低級の呪霊。それが一匹、摩耶子の対面の通行人である男の肩に取り憑いた。

気味の悪い声と覗き込むような視線。辺りでそれに気づいているのは摩耶子のみ。しかしそれも摩耶子は何の行動もせずに通り過ぎて行つた。

(異常現象とやらの影響か、それともそれに対する恐怖心の影響か。どちらにせよ呪霊

を視る機会が増えそう)

摩耶子は一人のためにため息をついていた。

(高校行つて、モデルやってお金貯めて、ジム行つて、ご褒美に美味しいもの食べて、友達と自由に遊ぶ。私はそれで良いんだ。呪いなんて関係ない。どうせ、この事態もアイツが全部解決するんだから)

☆

「ん……」

夜中、摩耶子は目を覚ました。原因はスマホから鳴り響いた。着信音。

日付は11月2日。時刻は2時32分。深夜だった。

「誰だよ……げっ」

頭を掻きながら摩耶子は画面を開く。それと同時に目に入った番号に顔を顰める。

「……無視したらもつと面倒になるか。——もしもし?」

〈ああ! やつと繋がりに!〉

電話口の声は年老いた女。摩耶子にとっては聞き覚えしかない声だった。

「二度とかけてくんなくて言ったよね。というか番号何処で知った？ 今何時だと思ってるの？」

「一刻を争う一大事なのでございます！ 話を聞いてください！」

「あーはいはい。こんな時間に老人の話を長々と——」

「悟様が封印されたのでございます！」

「……は？」

摩耶子は目を丸くした。時間といい内容といい、通話相手がついにボケてしまったのか、という思考が過ぎる。

しかし、続く老女の言葉はそんな思考と眠気を吹き飛ばしてしまうものだった。

「10月31日のことです。東京渋谷で発生した事態の收拾の為に派遣され、そこで封印された」と

「ちよつと待つてよ。渋谷でなんか大変なのが起こつたのは知つてたしそこにアイツが向かわされたつてのは分かるよ。だけど封印？ 封印して何？ あの歩く公害が？」

「冗談でしょ？」

「事実でございます。恐らく使用されたのは特級に相当する呪物であると。現在、日本各地で出現した結界も悟様封印後の渋谷での出来事が発端なのです」

「いやいやそんな……」

「へー大事なのはここからでございます。悟様の封印後、総監部は悟様を渋谷の首謀者の一人として呪術界を永久追放にすると通達したのでございます！」

「はあ」

馬鹿馬鹿しい話、と笑うには通話相手の剣幕は異常であったし、現に渋谷で何かが起こったのは事実だった。

しかし、摩耶子にとってその話にはわかに信じがたいものだった。

「……で、それで私への要件は？」

「へ急ぎ五条家へお戻り下さい！ 現当主である悟様がこうなってしまった以上、相伝の術式と血縁を持つ摩耶子様が最も――」

「ざっけんなー！」

老女の言葉を遮り、摩耶子は目を見開かせ瞬間的な怒りを露わにした。しかし、老女は鬼気迫るような声音で話を続ける。

「へふざけてなどおりません！ 総幹部の通達以降、禪院と加茂両家が我ら五条家を蹴落とす為の動きを始めています！ それに最早上層部は我々の敵も同然です！ このまま当主不在の状況が続けば、我らの立場はどうなることか――」

「知るか！ 私はまだ五条摩耶子じゃない！ 浅見摩耶子だ！ そもそも今の話がホントだったとして、こんな状況になってまで立場だの権力だのアンタらはいつもそう！

勝手に潰れてろ！ ボケ！」

ひとしきり言いたいことを言い終わった後、摩耶子は通話を切り電話番号をブロック、その後スマホの電源を完全に落とし近場のソファアームに投げつけた。そのまま枕へと顔を埋める。

「訳分からん！ 寝る！」

全てを忘れて眠りたい。摩耶子はそんな気分だった。

## 自分にしか出来ないこと

小学校にすら入っていないチビツ子の時から私は変なヤツだった。

他には視えないモノが視えて、子供にしては身体能力も高く、自分の中に眠ってる特別な術式チカラを既に自覚してた。

優越感？ 全能感？ そんな感覚を常に感じて、ともかく自信満々だった。

六歳の時だったかな。まあ色々あつて両親が両方死んじやつて、しばらくしたらウチにアイツが来た。

「君のお父さん、というか僕もなんだけど、五条っていうイイところの——」

私や父親みたいな目立つ真つ白な髪。どうやら父親は五条家とやらから家出して、母親とくっついて私を作ったらしい。その際に呪術だとか呪術師だとかの話も聞いた。

「このままお母さんの方の家族に引き取つて貰うつての手だよ。ただ……君、色々と視えちやつてるでしょ？ 一般人の家庭に預けちゃうのはどうも不安だね。だからさ、ウチに来ない？ ちょっと居心地悪いだろうけど、頭の固い老人共は僕が引つ叩いとくから」

五条家に来ないか、その誘いに私はノータイムで乗った。

ずっと、私はフラストレーションのようなモノを溜めていた。父の手前、母の手前、周囲の手前、幼いながらも自分の異常さを自覚して、力を自制していた。コイツに付いて行けばそんなことを考えなくて良い、好きに振舞える環境に行ける。そんな期待を胸に。

まあ。当時の私は言ってしまうえば鼻つ柱が高かった。自分に自信があつた。呪術師とやらにも簡単になれる自信もあつた。

—— だけど結局、その長鼻もすぐに折れることになる。

まず五条悟。血縁的には従姉妹いとこの筈なのに何故か戸籍上の兄になつてしまった男。正直、もう二度と会いたくない怪人。

呪術師としての訓練を始めてすぐに理解わかつた。コイツはモノが違う。

呪力量も呪力のコントロールも出力も術式の制御精度も、何から何までオカシイ特例中の特例。コイツの異常さを目の前にして、私の中にあつた自信はその大半がポツキリと折れてしまった。

それでも残つた小さな自尊心もすぐに碎かれた。私と同年代……アイツ曰く境遇も似てるとかという目つきの悪いウ二頭、加茂家の糸目、狗卷家のおにぎり。

同年代で私と同じか、それ以上の才能を持つヤツらが呪術界にはフツーに居た。

それから色々あつてすっかり自信の抜け落ちた私は逃げるように家を出て、今は青

森で普通の女子高生をやつてる。

だからもう、呪術云々に関わる気はない。そもそも古臭い視線に囲まれるのも好きじゃなかった。

それに——そこに私が居なくても、世の中は廻つてるんだから。

☆

「あ——……眠っ」

眼を擦りながら摩耶子は廊下を歩いてた。結局、あの電話が原因で満足な睡眠が取れなかったのが理由だった。

「昔の夢見ちやつたし……ムカつく……おはよ」

教室に入ると同時に声をかけてきたクラスメイトに返事をし、自分の席に座る。昨日程ではないが未だに生徒達は思い思いの噂話を続けていた。

（瑠璃まだかな……）

クラスメイトである瑠璃はまだ教室には来ていない。他にも数人の生徒が教室内か



ら欠けていた。

〔寝坊？　もうH R ホームルーム 始まるのに〕

摩耶子はスマホのメッセージアプリを開き瑠璃にメッセージを送る。しかし、既読表示すら無い。

〔熱……とかは無いよね。昨日元気そうだったし。寝坊だったら珍しい。ぼけつとしてるけど今まで一回も——〕

〔ホントに恐山行っちゃったのかな〕

その時、一人のクラスメイトの不安げな声が摩耶子に届いた。声の主は隣の席で会話している二人の女生徒。

〔写真撮りにいっただけじゃない？　流石には入ってないでしょ〕

〔でもでも、アレに映ってた面子全員まだ来てないよ。他クラスの子も来てないみたいだし……〕

〔——ね、ちよつと良いかな〕

〔浅見さん？　どっ、どうしたの？〕

〔今の話ホント？　恐山行った人が居るって〕

〔う、うん。昨日の夜にグループラインに写真が送られてきて、あの真つ暗闇の前に居たっぼくて〕

「誰が居たの!？」

「いつ、和泉ちゃんと松本君と上原さんと神原君と……あつ、あと冬水さんも写つてたの」

冬水。瑠璃の名字だった。

「……私、今日帰るからさ。先生に連絡お願いして良い?」

「えつちよつと」

返事を待たずして摩耶子は荷物を背に教室を飛び出した。驚く生徒、呼び止める教師。全てを振り払つて学校を出る。

「まさか……! そんな訳ない……!」

人目を憚らず全速力で走る。そうして辿り着いたのは何度か訪れたことのある瑠璃の実家だった。

そして、目の前には物々しい赤いランプを載せた何台もの白黒の車に警察官、瑠璃の両親。自らの鼓動が速まるのを摩耶子は感じていた。

「おばさん! おじさん!」

「あつ、摩耶子ちゃん……! ねえ、瑠璃が! 瑠璃が!」

泣き腫らした顔で瑠璃の母親は語る。夜間に瑠璃が家を出ていたこと、連絡が繋がらないこと、警察へと通報したこと。

そして、現時点で瑠璃はその他複数の高校生達と共に件の恐山へと向かった可能性が高く、それらしき目撃証言が幾つもあるということ。

鬼気迫る表情で瑠璃の父親から話を聞き出している警官と、自らに声も無く縋りつく瑠璃の母親を、摩耶子は呆然と眺めていた。

☆

「ねえっ、浅見ちゃん！ ひよっとしてアレ視えてるの!？」

呪いに関する話を持ち出してきたのは瑠璃からだ。高校に進学してまだ間もない頃、体育でペアを組んだ際に私が校庭に居た呪霊に視線を送ってしまったのがキツクケだった。

それ以降、瑠璃と良く話すようになった。というより向こうが積極的に話しかけてきた。今まで他に呪いが視える人に会ったことがなかったって喜んでた。

「憑りつかれてる人の側に行つてね、ジツと視るの。そしたら怒り出してこっちに向かつてくるから全速力で逃げる！ こうすると追い払えるんだ」

幾らか話して分かった。瑠璃はドが付くお人好しだ。昔から呪いの被害に悩む人達

にわざわざ助言したり助けたりを繰り返してたらしい。

呪いが視えることⅡ呪術が使えるって訳じゃない。瑠璃はただ呪いに敏感なだけの一般人。

「マヤちゃんはあるあいうのを倒せちゃうんでしょ？ いいなー」

呪いの危険さも冗談の効かなさも十分に分かってる。それでも、怖い目に遭っても痛い目を見ても瑠璃は今まで人助けを止めなかった。その真つすぐさにちよつと嫉妬したりもした。

なんでわざわざリスクを背負ってまで他人を助けられるの？ いつかした責めるよ  
うな私の質問に、瑠璃は困ったような表情でこう言った。

「私にしか出来ないことだと思っただから」

私を初めてマヤ<sup>あだな</sup>で呼んでくれた。初めて出来た、私の友達。

☆

「栄養バー詰め込んで、後は現地で何とかして……いや、水の確保の方が難しいか？ ス

マホのバッテリーは要らない、電波繋がらないみたいだし。後は……トイレ……は適当にすればいいか。あつ、歯ブラシも」

五条悟の封印。それが事実であれば日本は未曾有の危機に陥っている。摩耶子はそれを理解していた。

同時に、事態の收拾の為に優秀な呪術師達は忙殺されているだろうことも。

「下北駅前までお願いします。あつ、恐山行こうとか考えてるワケじゃないですよ？ 近くに実家があるんで——」

外部の助けは期待出来なかった。この異常事態の中、動ける人間はそれぞれがそれぞれの理由を持って動いている。

「うわー警察多つ。抜け道探さないと……」

服装はジョギング用のランニングタイツ、シューズ、インナー、上下にウインドブレーイカー。後ろ髪を一括りにまとめ、必要物を詰め込んだリュックを背負い、タクシーで近場の駅へ。案の定警察によってされていた封鎖を掻い潜り、山道を抜ける。

そうして、摩耶子は結界の前に辿り着いた。

「うっ」

視覚効果の付与された結界によってどこまでも続く暗闇。逃げ出した筈の呪術が蔓延る空間を目の前にして、摩耶子は息を呑んだ。

「……所詮、高校から出来た友達だよ。まだ一年しか付き合い無いし、向こうがどう思っているかなんて分かんない。どうせここに来たのも、私の注意を無視して無鉄砲に誰かを助けようと思ったからなんですよ。でも」

パチンと、摩耶子は自分の頬を両手で叩いた。

「今、あの子を助けられるのは私しか居ない。私抜きでも世の中は廻っていく。だけど……弱かろうが強かろうが才能が有ろうが無かろうが、これが出るのは私だけだ」  
 そう自分に言い聞かせ、摩耶子はその一步を踏み出した。

「よお、俺はコガネ!! この結界の中では死滅回游つて殺し合いのゲームが開催中だ!! 一度足を踏み入れたらオマエも詠者!! それでもオマエは結界に入るのかい!?!」

コガネ。結界の中で行われている儀式、死滅回游への参加意思を問う式神。イエスト答えれば参加者となるのが確定し、以後制定された総則が適用されることになる。

11月2日 14:21 恐山結界

「……うん、問題無い」

死滅回游泳者 五条 摩耶子